


科目名	特別講究 I (発達心理学) 英語名: Special Seminar on Developmental Psychology	必修/選択	選択必修	
		単位数	2 単位	
		担当教員	仁平 義明	
【授業概要】				
<p>近年、発達心理学の研究の中心は、7, 80 年前に提案された発達段階・発達課題理論に基づく研究や発達のマイルストーン研究から、発達の「阻害要因」「促進要因」、「緩衝要因」、発達プロセスへの介入方法と効果のエビデンスをえるための研究へと移ってきた。この講究では、3つの要因と介入方法の問題を教育実践上の問題として扱い、博士論文のための研究モデルになるような独自性を持った研究について学修する。発達の「阻害要因」の代表的な問題としては、健全な精神発達を阻害する「いじめ」の影響に関する研究を分析し、学校や職場での「いじめ」対応と防止プログラム、効果の検証の仕方を学修していく。また、近年の WHO を中心とする「有害な子どもの時期の経験」(Adverse Childhood Experiences) 研究の展開を概観する。「促進要因」では「心の回復 (レジリエンス)」に関する研究を扱う。さらに阻害要因のマイナスの影響を緩和する「緩衝要因」となる「交渉力」の教育についても学修する。</p>				
【キーワード】				
発達「促進要因」・「阻害要因」・「緩衝要因」、いじめ、心の回復 (レジリエンス)、交渉の教育				
【授業の到達目標】				
<p>(1) 教育の場での「いじめ」と「いじめ対応」の代表的考え方、たとえば日本の文部科学省、フィンランドの KiVa プログラム、オランダの実証的・実践的いじめ研究者オルトフによるものの根本的なちがいと、それぞれに関連した知見を十分に理解し、自分が現場で経験したいじめ対応の課題と照合しながら、そこで有効な具体的いじめ対応方策の策定と効果測定ができるようになる。</p> <p>(2) 生涯発達の観点から、成人期の「職場のいじめ」では、たとえば看護という場が、なぜ世界でも「職場でのいじめ」の代表的なテーマになるほど、いじめのリスクが高い場なのかなど、現場でのいじめ発生のメカニズムを理解し、対応研究について知識を持ち、研究と対応の立案が可能になる。</p> <p>(3) 「心の回復 (レジリエンス)」研究の歴史と展開を知り、現場での心の回復の支援方策が考えられるようになる。</p> <p>(4) 「交渉力」教育の基本的な方策を習得する。</p>				
【教育の方法】				
スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】				
【授業計画】				
回	内 容			
1	オリエンテーション: 本講究のねらいと進め方			
2	発達の「阻害要因」としての「いじめ」と影響			
3	文部科学省による「いじめ」の定義と対応の考え方の変遷			
4	いじめ対応「KiVa プログラム」の考え方、世界での効果検証			
5	オルトフの「いじめ」研究と対応の考え方の特色			
6	「職場のいじめ」と対応・教師による「子どものいじめ」と対応			
7	「有害な子どもの時期の経験」(ACEs) に関する WHO の考え方			
8	「有害な子どもの時期の経験」の影響に関する研究: 近年の展開			
9	「心の回復 (レジリエンス)」研究の歴史と展開			
10	「心の回復 (レジリエンス)」の測定			
11	「心の回復 (レジリエンス)」のための教育的支援			
12	「交渉」概念と交渉研究の展開			

13	「交渉」過程の分析法
14	「交渉」の教育法
15	発達の「阻害要因」「促進要因」「緩衝要因」—総括と展望
試験	
【履修にあたっての準備・履修上の注意点】	
○最新の研究について知るために、国際的な研究データベースを利用して海外の文献検索を行うようにしたい。英文文献を多用するので、考慮の上で履修のこと。	
【スクーリングでの学修内容】	
○スクーリングでは、学修の初期には、授業の目的や学修の概要を知り、この科目を通じて何を指すか、学生と教員の間で考えを共有する。	
○また、授業内容のうちから自分で選んだ「いじめ」「職場のいじめ」「心の回復（レジリエンス）」「交渉教育」のいずれかに関するテーマについて研究データベースを使って文献を実際に検索し、読み込んで、まとめた内容を発表する。	
○さらに、選択したテーマが、現場でどのような解決すべき課題を抱えているか、どのような方策がとられているか、どのような測定が実施されているか、たとえば学校単位での具体例を明らかにしておく。	
○学修の終期には、学修のまとめとしてのスクーリングを行う。	
○学修初期のスクーリング前には、扱うテーマの候補を整理しておき、スクーリング時に教員とともに、テーマの絞り込みをしながら、最も適切な文献を検索する。スクーリング後にはそれ以外の文献をさらに検索して読み込みとレビューを行っておく。	
○学修の後期には、スクーリング前に、先行研究を参照した上で、各自が独自の①「いじめ」あるいは「職場のいじめ」対応方策案、②「レジリエンス」のための方策案、③「交渉教育」方法案のアウトライン、どれかを準備しておくことが求められる。スクーリング時にはそのアウトラインを教員とともに詳細に検討して、スクーリング後には、その方策を実施可能な程度のものに明細化し、効果の検証方法を明確にすることが期待される。	
○また、学修を通じて得た知見が現場での課題解決にどう貢献したか、具体的な課題の解決を試みて、エビデンスに基づく検証を行った結果をレポート、あるいは学会等での発表としてまとめを行う。	
○スクーリングは、この2つの時期を含み、合計4コマ6時間以上をめぐり行う。	
○スクーリング時の課題の詳細は、オリエンテーションの際に説明する。	
【スクーリング外での学修内容】	
○授業テーマごとに重要な参考文献のリストと参考資料を配布するが、自分でも Google Scholar や国際文献データベースで海外の関連文献を積極的に検索し、読み込んで知識を広げておく。	
【評価方法】	
○可否については、各自が選んだテーマについてのプレゼンテーション・レポート（50%）、科目修得試験（50%）で評価する。	
【テキスト】	
○仁平義明『教室の中のゾウー先生がいじめる！』※受講生に配布。	
○仁平義明『職場のいじめとハラスメント』 ※受講生に配布。	
○仁平義明『品位ある・あたたかい・フェアな交渉力を育てる』※受講生に配布	
【参考図書・論文】	
※授業テーマごとの文献リストや文献はスクーリング時に配布。文部科学省の「いじめ」関係の通知や資料は、各自入手のこと。	
○オルヴェウス他著（2013）『オルヴェウス・いじめ防止プログラム：学校と教師の道しるべ』オルヴェウス・いじめ防止プログラム刊行委員会訳。 大学図書。	
○仁平義明（2020）「いじめ対応」3つの考え方—文部科学省のいじめ対応方針・傍観者対応重視のKiVaプログラム・オルトフのいじめ首謀者対応モデル—. 共生科学、第15号。	
○仁平義明（2009）「人間力育成のパラダイム・シフト—ハーディネス（心の頑強さ）からレジリエンシー（心の回復力）へ—」現代のエスプリ、500号、pp. 194-205。	
○仁平義明（2016）「レジリエンス研究の展開」『児童心理』1月号、13-20。	

○WHO (2009) 『Addressing adverse childhood experiences to improve public health: Expert consultation』
WHO Meeting Report.

【教員メッセージ】

- 子どもの発達のために、新しい「いじめ対応方策」、あるいは「心の回復（レジリエンス）のための介入方法」「交渉教育法」をつくり出して、実践・研究を行い、成果を海外に発表してほしい。
- 自分の研究や実践がほんとうにオリジナリティがあるものかどうかは、世界の先行研究や先行実践を徹底的に調べないかぎり、わからない。オリジナリティがあるものだと評価されるかどうかは、国際的なジャーナルに投稿すれば、すぐに明らかになる。「すでにわかっていること」に対する「新しいもの」、「解かれていない問題を解いたもの」でなければ掲載はされない。掲載されるまでのエディターやレフェリーとのやりとりは、知的に楽しい経験である。

【備考】

- 質問や研究上の相談には、スクーリングのときだけでなく、随時、メールやZoomなどで対応する。
- 受講者の知識の程度と関心のフォーカスに応じて、内容は柔軟に変更する。